

しつかり刻まれてます

田井 智彦 師

亡くなった後の仕事



先に亡くなった人はズルイ、と思うことがあります。こっちは老(ふ)けていくばかりなのに、まぶたの裏に浮かんでくるあの顔も、耳の奥底に残っているあの声も、まったく歳を取らないし、なにより、悪い思い出は色あせて、いいイメージばかりが色濃くなっていくんですよ、なぜか。

残してくれた言葉だってそう。ちょっと困ったときなんか、すぐに頼りにしてしまうんです。死んでるのに、「たぶん、こう言ったらうな」とか「ああ、怒られる」とかね。言われっぱなしで反論もできないし、ときには、それがしがらみになったり足かせになったりする。でも、それはそれで心地よくもあるんです。あの人がまだわたしの人生に関(かか)わっている、みたいなものですね。残された言葉というか教えに、亡き人の願いが込められているからなんでしょうか、逆らえないんです、あの人に。だから、ズルイ。

亡くなる前は、そうじゃなかった。関係が近ければ近しいほど、「言われんでもわかっとるわ」と反発して、ケンカにもなりましたよね。でも、いなくなつて初めて気付くんです。「ああ、このことを言ったのか」って。死んだ人は、亡くなった後の方が仕事するって、そういうこと

なのかってね。わたしの所へ還(かえ)ってくるって、こういうことなのかと思うんです。

誰にだって、懐かしい人との思い出はごまんとあるし、忘れられない言葉の一つや二つはありますよね。もちろん、わたしにもあります、そんな言葉が二つほど――

死を覚悟した状態で

「田井よお、ホンマ苦しいときはなあ、殺してくれとしか思われへんのや。命の瀬戸際で、お念仏なんぞ出えへんぞ」

何があっても裏切れない大恩人であり、二人いる師匠の一人、僧侶であり説教師であり物書きだった某先生のひと言。もう10年近く前の話です。

型破りで精力的、前をしつかと見すえながらも、繊細かつ淋(さび)しがり屋で人の心を読むのが実に巧(うま)い人でした。

缶に入った両切りのタバコを、40本から50本も喫(の)んでいたんです、1日に。成るべくしてなった「肺がん」。お連れ合い曰(いわ)く、「肺がんになって本望。他のがんなら後悔してたけど、あれだけタバコを吸ってたからね」病に冒(おか)されても、先生は先生のままでした。

「好き放題、充分(じゅうぶん)生きた」と豪語したかと思えば、人生初の入院で、お経典の「人は、ひとり生まれ、ひとり死んでいく」の言葉を実感し孤独に身がさいなまれた、とも聞きました。

手術前の検査を重ねるうち、カルテの中だけに自分の命があるかのように錯覚されたそうです。重要な検査の当日前、始発のモノレールに飛び乗り逃げ出し

もしたそうです。

長時間の検査に身体がたえきれず、持病の喘息(ぜんそく)が暴発。とうとう、西洋医学に見切りをつけ、漢方薬を服用するように。

「どや、元氣そうになったやろ」の言葉は弱々しく、肉はそげ落ち骨と皮だけのような身体に。激しく咳(せ)き込み、呼吸器の入り口にへばり付く痰(たん)を切る。悶(も)え苦しむしかない状態。「死」を覚悟されたのが、「死」を待つておられたのか。そのころ言い放ったのが、先ほどの「お念仏なんぞ」の件(くだり)です。

もう一つのメッセージ

死の淵に立っていると実感した人間の本音を吐露(とろ)してくれただんだと思います。でも、「やっぱり、ナンマンダブツやのう」と言っただけだった。だから、忘れられない。

話はこれで終わりじゃありません。結局、近代医学に降伏して終末医療を受けることに。緩和ケアによって小康を得られました。最後のお見舞いで、わたしの胸にしつかりと刻んでくれた、もう一つのメッセージ

「ワシはなあ、自分からお念仏を捨てたと思ひ込んでたんや。でもなあ、田井よお。阿弥陀はんは、ワシを捨てずにいてくれてたんや。ほら、いまでも、ワシの口から、ナンマンダブツが出てくださるんや。変わってないんや。捨てられてないんや。ひとりじゃなかったんや。かたじけないのう」

うれしすぎて忘れられない、お浄土を恋しくさせる珠玉のひと言です。

◆妙延寺仏教婦人会総会の開催

妙延寺仏教婦人会総会を、【三月二十日(日) 午前十時三十分より】開催いたします。会員の皆さま・新規のご加入希望の方も、気軽にご参加お願ひします。当日、年会費(五百円)を集めます

◆婦人会への入会お願ひします！

仏教婦人会とは、妙延寺の門信徒のご婦人の方々に作られた組織です。浄土真宗本願寺派 仏教婦人会総連盟に所属する団体です。

活動内容は、当寺法要のお手伝い(お斎の接待など)・花まつりの運営や研修会への参加など、寺院活動の根幹を担っていただいております。堅苦しいものでなく、皆さん気軽に楽しく参加いただけます。会員の皆さまの会費が、婦人会活動の源となりますのでご入会お願ひいたします。

※ 年会費：五百円(どなたでも入会できます)



◆住職のおすすめ情報

かつらしゅんちゆう

落語家さん桂春蝶さんの「落語で伝えたい想い」シリーズです。前号では当シリーズの「鏡の中の親鸞く歎異抄より」をご紹介しましたが、今回は「行と業(ぎょうとごう)く私は千日回峰行を生きました」です。



桂春蝶 落語で伝えたい想い
「行と業く私は千日回峰行を生きました」



最も過酷な修業といわれる千日回峰行がテーマ。千日回峰行達成者に取材した話題の新作です。千日回峰行とは比叡山で7年間にわたって行う修行。比叡山などを巡礼しながら地球1周分の約4万キロを踏破するという荒行。「人間が生まれながらに持つ煩惱、それが業なら、それと向き合わせてくれるのが行。聞く人には自分の人生に重ねてもらいたい。聞き終わって心の中が温まる落語です」

ユーチューブでも見られます。

「鏡の中の親鸞く歎異抄より」も視聴ください。

坊守のつとめ



先日、娘の結婚式に出席した。

“式”というのは苦手で、雰囲気や挨拶の言葉で、いろいろ思い出すだけで涙が出てくる。結婚式は特にそうで、リハーサルで対面するなり涙があふれてきた。自分でも情けない。

お相手は直人くん、わがままな娘の横でいつも暖かく見守ってくれている。誠実で礼儀正しい好青年で、幸せそうな二人の姿を見ているだけでホッと安心する。いつまでも笑顔が絶えない家族を築いていってほしいと願うばかりだ。

式も後半に入り、幼い頃からの写真が流れ、娘の挨拶へと式も終盤に入り、涙腺もゆりみばなしだ。後日、娘から「お母さん大丈夫やった！」と心配してもらった。始末だ。

結婚式のD&Dができあがり、みんなで見えた時、やっぱり涙が溢れてきた。「また泣いてる」と言われてしまった。

亡き母も多分。娘達を送り出す時にはこんな気持ちだったんだろ うなと思ひ、一歩母に近づけたような気がする。

